



本語教師のための学習ページ

日進月歩: 日に日に進化する日本語教育情報を紹介します

日進月歩



日本語情報誌「Ja-Net (ジャネット)」(スリーエーネットワーク社) から、日本語教育に関する記事を紹介します。

No.45 2008年4月25日発行

巻頭寄稿

漢字の学習は語彙の学習

麗澤大学外国語学部

麗澤大学大学院言語教育研究科日本語教育学専攻・教授
玉岡 賀津雄



日本語の語彙は漢字ばかり

外国語の理解において、語彙の知識は重要だといわれている。日本語では、語彙の多くが漢字二字で書かれており、漢字を学ばなくては、語彙を学習することさえできない。しかも、漢字が単独で使われることは少ない。むしろ、漢字を組み合わせることで、さまざまな単語が作られている。二つの漢字からなる熟語が国語辞典の約70%を占めていることが、それを裏付けている。漢字は、意味上の最小単位である「形態素」とみなすことができる。そして、個々の漢字がネットワークのように結びついて多くの語彙を形成しているのである。

漢字の字形の難しさ

非漢字圏からの留学生が、英語は26種類のアルファベットで書かれているのに、漢字はかたちが複雑で数も多いので、覚えるのが難しいと言うのをよく聞く。1,945字からなる常用漢字の平均画数は10.84画で、アルファベットに比べると画数は5

倍くらいありそうである。もっとも画数の少ないのは1画の「一」であり、もっとも多いのは23画の「鑑」である。確かに、これらの漢字を、ひとつひとつ別々に覚えなくてはならないとすれば、きわめて困難な学習であるといえよう。

しかし実際には、常用漢字のうち1,678字が二つ以上の要素からなっている。さらに、669字の常用漢字は、214種類の部首のうちわずかに10種類で構成されている。これは、漢字が部首などの小さな要素を繰り返し使って作られていることを示している。このため、非漢字圏の日本語学習者でも、漢字の学習がある程度進むと、どのような要素が頻繁に使われ、それがどのような漢字に使われているかが、ぼんやりとはあるが分かってくるようである。したがって、漢字を作っている小さな要素を整理して教えることは、日本語学習者の漢字学習を助けるために重要である。

漢字の「使用頻度」という指標がある。これは、新聞などの印刷物に出現する漢字の延べ頻度のことである。字形の複雑さと、この漢字の「使用頻度」との関係を考えてみる。単純に、漢字を書く時間の

み^{かんが}を考^{かくすう}えると、画^{おほ}数の多^{さかな}い「魚」よりも「人」の^{ひと}方^{ほう}が容^{よう}易^いである。しかし、ある程度漢字に慣れると、漢字や漢字熟語がどれくらい頻繁に使われるかが、漢字の書き取りの速さに影響する。日本語母語話者が漢字を音で聞いて字形を思い起こして書き始めるまでの時間を、漢字の想起時間と仮定して実測してみると、字形の複雑さ、つまり画数の影響は、使用頻度の高い漢字または熟語にはみられず、使用頻度の低いものについてのみ現れる(玉岡・高橋、1999年『心理学研究』に掲載)。つまり、字形の視覚的な複雑さは、あまり使わない漢字の字形を想起する場合にのみ強く影響しており、画数が多いからといって必ずしも難しい漢字とはいえないということが分かる。

漢字の意味の難しさ

使用頻度と字形との関係について述べたが、使用頻度は、意味の理解にも影響する。使用頻度の高い漢字ほど、意味の理解がより速くなる。また、漢字一字の使用頻度とともに、漢字熟語の単語としての使用頻度も、独立して影響している。たとえば、「学」という漢字は、単語レベルの使用頻度の高い「学校」という熟語の中で使われた場合には簡単に意味が分かる。しかし、単語の使用頻度の低い「学術」という熟語に含まれると、意味が難しい。つまり、漢字一字の使用頻度、熟語としての使用頻度、さらに概念の抽象性が、それぞれ独立して漢字の意味理解の難しさに影響しているのである。

さらに例を挙げると、「楽」という漢字が、「音楽」という熟語の中で使われた場合には簡単に意味が分かる。しかし、「安楽死」という難しい単語の場合はどうであろうか。これら三つの漢字は、「安」が小学校3年生、「楽」が2年生、「死」が3年生で学習する漢字であり、漢字そのものは比較的簡単である。ところが、この「安楽死」という単語の意味は難しい。中国語を母語とする日本語学習者であれば、中国語の漢字の知識から日本語の意味をある程度推測できるであろう。それでも、必ずしも両言語でその漢字が同じ意味を持つとは限らないため、日本語の漢

字熟語の意味を誤解してしまう場合があることにも注意しなくてはならない。

このように、日本語では、限られた数の漢字の組み合わせでさまざまな語彙が形成されており、漢字は効率のよい意味記憶の単位であるともいえる。漢字を指導する際には、ある漢字が他のどのような漢字と結びついて熟語を形成するかを示し、日本語学習者が、漢字を単位とした意味的ネットワークを形成できるよう助ける工夫が必要であろう。

漢字の発音の難しさ

学習した漢字数の少ない初級レベルの日本語学習者と、多くの漢字や漢字熟語を学習した上級レベルの学習者とは、漢字の誤りのパターンが異なる。日本語学習歴2年以内の英語母語話者では、漢字の字形の誤りが圧倒的に多い。しかし、日本語学習が進むにつれ、発音と関連した誤りが多くなる。たとえば、「意識」を「意識」と書くというように、発音が同じで字形が似ている漢字と誤ったりすることがある。このような誤りは、日本語の漢字の音韻的特徴に起因している。発音が一つしかない漢字は、常用漢字の中で696字(訓読みのみ32字、音読みのみ664字)に過ぎず、残りの1,249字は二つ以上の発音をもつ。漢字二字熟語であれば、可能な読み方は二つの漢字の発音数を掛けた数となるので、組み合わせが増え、熟語ごとに正しい発音を覚えなくてはならなくなる。

六書分類によると、常用漢字のうち1,164字が形声に分類されており、これらの漢字が、構成要素に音を示すヒント(「音符」という)をもっている。例えば、「白」は音読みで、ハクと発音される。この発音は、「白」を構成要素とする「拍」「伯」「舶」でも同じ発音となる。このように、漢字の音読みでは、音符の示す音の一貫性は高い。しかし、こうしたヒントも必ずしもあてになるというわけではなく、しかも、これは訓読みには利用できない。

さらに、日本語の発音は多様性に欠ける。「小」、「省」、「商」など、ショウと発音される漢字は、1,945字の常用漢字の中だけでも65種類ある。超

上級レベルの日本語学習者でさえ、漢字熟語の書き取りテストで、同じ発音を持つ漢字と間違えることがしばしばあるが、それは同音の漢字が多いことによる。

このように、漢字の音韻的ネットワークは、一つの漢字が複数の発音を持ち、さらに一つの発音が複数の漢字で書かれるという二重の複雑な構造を持っている。中国語を母語とする日本語学習者でも、漢字の発音となると習得が難しいのは、このような日本語の漢字と発音の関係の複雑さが原因であると思われる。漢字の発音を教える場合には、個々の漢字とともに、その発音を共有する他の漢字を示すなど、二つの音韻的な記憶の側面から教える工夫が必要であろう。

漢字を書くこと

漢字の筆順は、手の一連の動きを介して漢字の書字運動として記憶される。脳の障害によって漢字の字形記憶が失われた漢字失語の例では、漢字を筆順にしたがって指でなぞると漢字の意味が浮かぶという現象が知られている。この症例を見ると、漢字に運動性の記憶が存在することが分かる。近年、ワープロやコンピュータの普及により漢字を手で書くことが少なくなり、漢字が思い出せないという経験を訴える人をよく目にする。これは漢字の運動性記憶を使わなくなったことが原因であろう。初期の漢字学習では、手で漢字を書かせることが漢字の記憶を促進すると考えられるので、はじめからワープロに頼り過ぎないように注意する必要がある。

漢字と語彙の学習

漢字の学習が語彙の学習と切り離して考えられない理由は、次のような書き取りをみると分かりやすい。たとえば、「りょう」と「ほこう」の漢字を書く場合に、語彙使用頻度の高い「旅行」の「行」は書いても、語彙使用頻度の低い「歩行」で使われている同じ「行」を書けない場合がよくある。両語彙に使われている三つの漢字は、日本語能力試験2級

までに配当されている基本的な漢字であるため、一字ずつの単位で見れば「歩行」も「旅行」も同じ難易度である。ところが、たとえば日本語学習者が漢字を一字の単位としてはすでに習得していても、漢字二字熟語の場合には、二つの漢字の組み合わせで語彙を記憶しなくてはならず、語彙を構成するそれぞれの漢字が持っている多様な同音語の中から適切なものを選択しなくてはならない。たとえば、「こう」に相当する漢字は「高」、「公」、「工」、「校」、「交」など多様であり、どういう漢字が語彙に使われているかを知らなくては、漢字一字の知識から語彙に使用されている漢字を推測することは難しい。つまり、「りょう」や「ほこう」の漢字表記を「りょう」と「こう」とか「ほ」と「こう」とか、それぞれに相当する漢字を個別に想起して結合させて書くのではなく、「旅行」や「歩行」をひとまとまりの語彙の単位で想起しなくては語彙を漢字で書くことができない。語彙がどのような漢字で表記されているかを知らなくては、個々の漢字の知識も十分に活用できないのである。そうすると、語彙の学習を介して漢字を習得していくことが、遠いようで近道なの分かるであろう。「急がば回れ」－「漢字は語彙から学習」ということになるのではなかろうか。

玉岡賀津雄 (たまおか かつお)

1990年、カナダ・サスカチュワン大学大学院博士課程修了(Ph.D.)。1990年から1998年まで松山大学講師および助教授、1998年から2008年3月まで広島大学留学生センター助教授および教授。2008年4月より麗澤大学外国語学部および同大学大学院言語教育研究科日本語教育学専攻教授。

心理言語学を専門とする。言語の認知処理モデルの構築をめざして、音韻、形態、語彙、統語構造、談話がいかに言語処理に影響するかを解明するために幅広い研究を行っている。また、日本語のコーパス頻度データを使った統計・数学的分析、中国語・韓国語・トルコ語・英語を母語とする日本語学習者の言語習得研究も手がけている。